

# 沖縄の自然と沖縄本島の水事情

沖縄は160の島々からなる島しょ県で、大きな河川や湖などの水源に恵まれていないことに加えて、降水量は年や季節によって大きく変化するため、水を安定的に確保することが困難な自然環境にあります。

終戦後の1946年(昭和21年)、約51万人だった沖縄県の人口は、本土復帰時の1972年(昭和47年)には約96万人、2020年(令和2年)には約145万人※1 を超え、復帰直後と比較すると約1.5倍に増えています。



(写真)国頭村 座津武川  
(座津武取水ポンプ場取水口付近)

沖縄の河川は、本土の河川と比較して流域面積が小さく、延長も短いなどの特性があり、安定的に水を確保することが困難な状況にあります。そのため、水量の少ない河川からの取水に努めるなど、安定給水に必要な水源を確保しています。

沖縄本島の水源は北部と中部にあります。また、水源の大部分を占める北部の河川水とダム水は、県の人口の約80%が集中する、中部と南部の消費地へ送っているのが特徴です。

沖縄の気候は亜熱帯海洋性であり、平均気温は23.1℃※2 と1年を通じて温暖です。

平均降水量は2,086mm/年※3 で、全国の1,718mm/年※3 を上回っており、全国でも比較的雨量の多い地域です。しかし、人口密度が高いために、一人あたりの水資源賦存量は、1,739m<sup>3</sup>/人・年※3 と、全国の3,332m<sup>3</sup>/人・年※3 の約52%に過ぎません。

また、年間降水量の大半が5月・6月の梅雨期と、不定期に発生する台風の襲来時に集中しているため、年間を通して水を安定的に確保するには厳しい環境となっています。

(注) 水資源賦存量とは、降水量から蒸発散によって失われる量を差し引いた量に、当該地域の面積を乗じた値で、水資源として、理論上人間が最大限利用可能な水の量を表します。地域によって自然条件から利用可能な水の量は異なりますが、その違いを水資源賦存量によって知ることができます。

参考資料 ※1 沖縄県推計人口2020年6月(沖縄県企画部)  
※2 1981~2010年 那覇平均値データ(気象庁)  
※3 令和元年度版日本の水資源の現況(国土交通省)  
1986~2015年の平均値で、国土交通省水資源部調べ



## 月別降水量

## 那覇の月別降水量

